



企業と連携した探究学習支援エコシステム構築事例のご紹介と 見えてきた論点

株式会社Study Valley

代表取締役 田中悠樹

自己紹介

田中悠樹（タナカユウキ）

東京大学大学院卒業後、ゴールドマンサックス証券に入社しテクノロジー部に勤務。株式会社リクルートホールディングスではUS・イスラエルのアーリーステージスタートアップへの出資を担当。

様々な企業への投資を経験する中で、日本の未来を変えるためには子どもたちへの教育の拡充が重要であると考え、開発、マネジメント、投資など自身の幅広い経験を活かし、2020年に起業。

「Study Valley」は学びに関わる関係者と協力共創するための学び谷であるとともに、ただ谷に集めるのではなく、それをさらに「繋いでいく」という意志を込めたロゴデザイン。



株式会社Study Valleyについて

事業内容

- ①創業初年度より経済産業省からの委託を受けて、STEAMライブラリーを構築
- ②探究学習に特化したプラットフォーム「Time Tact」を提供 キャリア教育アワード受賞
- ③各地域にて地方テレビ局と共同の探究枠組みを展開 7局と事業提携（広島は中国経産局と連携）

会社名 : 株式会社 Study Valley（スタディーバレー）
創業 : 2020年1月
本社 : 東京都江戸川区中葛西 5-20-14 水戸ビル 2F
資本金 : 185百万円(資本準備金含む)
CEO : 田中悠樹
社員 : 35名（業務委託含む）

日本のEdTechで唯一「すごいベンチャー」選出@2022



漠然とした不安・・・

なんとなく皆さんが思っているであろう不安

このままじゃ日本まずいんじゃないか？

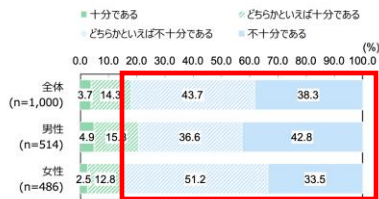
少子高齢化

地方過疎化

・・・

20年30年後の日本は明るい、と
自信をもって言えるか？

質問21：あなたは、少子高齢化に対する現在の政府の対応をどのように考えますか。（選択式（単一））



※引用元：日本財団様 18年度意識調査

では、どうするか？

そもそも不安に
思っているも解
消しない

不安が解消され
ない不満
→文句

不安は自ら行動
しないと解決し
ない！

信念

①探究学習がうまくいかないと日本が終わる

②Study Valleyがうまくいかないと探究学習が
終わる

つまり

Study Valleyがうまくいかないと日本が終わる（かも）

漠然とした不安・・・

なんとなく皆さんが思っているであろう不安

とにかく時間がない

では、どうするか？

事業を通じて、これまでにお会いしてきた先生方は探究の現場で奔走

信念

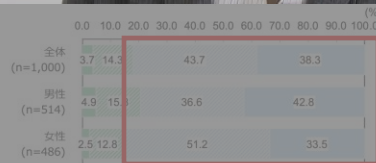
疲弊感が漂い始めている

①探究学習がうまくいかないと日本が終わる

やっぱり探究学習って絵に
書いた餅で
学校でやるのは無理だよね

つまり

Study Valleyがうまくいかないと日本が終わる (かも)



※引用元: 日本財団様 18年度意識調査

探究支援事業展開の背景

創業当初は学校にフルコミットする形で探究学習を支援。その中で見えてきた課題は、優れた教材開発だけでは開発が難しく、探究を回す「仕組み化」の遅れ

学校現場の探究学習推進課題

- 「そもそも何に興味があるかわからない」といった理由でテーマが定まらない生徒が毎年一定数出てしまう。
- 設定したテーマで仮説検証や調査分析をその後に行う必要があるが、先を見通すことが苦手な生徒が多いので、探究サイクルを回す途中で一からやり直す必要がある場合もある。
- 生徒が主体的に取り組む授業なので、他教科より進捗に差が出やすいのは致し方ないが、各生徒の取り組み状況を把握できていないため、フォローが遅れてしまうことがある。
- 本や新聞だけでなくICTツールやスマホを使ってネットから調べることができるようになり、様々な情報を得られるようになっているが、その情報をまとめる際に漏れやダブリが生じて、時間をかけている割に中身の薄いアウトプットになっている。
- 毎年成果物の作成に時間がかかるため、その時間も考慮した計画を立てる必要があるが、結果として探究する時間が短くなってしまい授業運営が大変。

Q4-2の経験年数別の回答上位3項目を抽出

1・2年目 (n=39)			3～5年目 (n=47)			6年以上 (n=38)		
1	探究方法の指導 (問いの立て方、仮説の設定、まとめ方等)	59.0%	1	探究方法の指導 (問いの立て方、仮説の設定、まとめ方等)	61.7%	1	指導教員の専門性 (教科・興味)	52.6%
2	指導教員の専門性 (教科・興味)	56.4%		指導時間の確保・不足		2	外部機関との連携 (情報入手、連絡調整等)	50.0%
3	評価方法 (評価基準の設定、評価方法の工夫、個人内評価の活用等)	53.8%	3	年間指導計画・カリキュラムの立案	55.3%	3	指導教員間の連携・協力 (連絡調整・目線合わせ等)	47.4%
						評価方法 (評価基準の設定、評価方法の工夫、個人内評価の活用等)		
						指導時間の確保・不足		

※引用元：福島大学「県内高校教員の半数以上が「探究方法の指導」などに課題～県内初となる高校「探究学習」指導に関する調査を実施～」

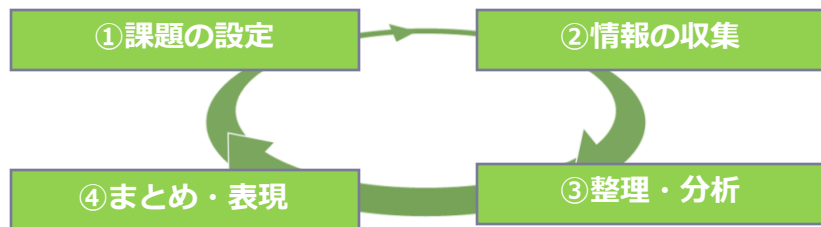
左記現場感の課題および上記福島大学の調査から、
「優れた探究教材」
さえあれば問題が解決できるか？

→No(これが教科科目と違う課題だから難しい)

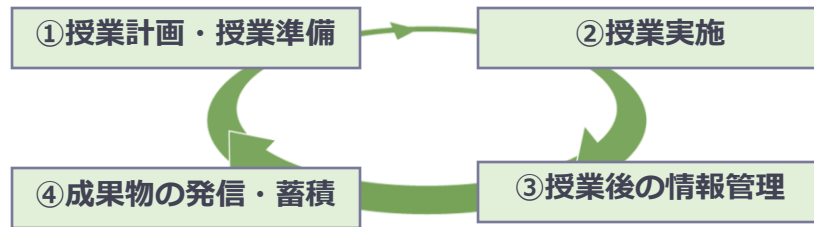
探究支援事業の概要（探究を回す）

探究学習プラットフォーム「TimeTact」を提供。学校現場における探究学習のお悩みにお応えするため、学校サポート担当が人的サポートを提供しつつ、効率的な運用方法をシステム開発

生徒側へのご支援



教員側へのご支援



探究支援事業の概要（探究を回す）

探究学習プラットフォーム「TimeTact」を提供。学校現場における探究学習のお悩みにお応えするため、学校サポート担当が人的サポートを提供しつつ、効率的な運用方法をシステム開発

株式会社Study Valley(社内探究用)
提出物テンプレート一覧

タイトル	提出物種類	ステータス	変更・グループ別内容	最新履歴/可視範囲
12/22 2023 YH Town meeting 出欠簿 「1」 より	報告書 生徒提出用紙	なし 2023/12/11 18:00	更新 再提出 削除	8人 20人限定なし
Google Drive連携テスト より	報告書 生徒提出用紙	なし なし	更新 再提出 削除	1人 8人 10人限定なし
Google Drive連携テスト より	報告書 生徒提出用紙	なし なし	更新 再提出 削除	8人 8人 7人 10人限定なし
調査テーマ提出「ALAPT_2023/10」			更新 再提出 削除	1人



株式会社Study Valley(社内探究用)

田中 悠樹さん(生徒)

[ホーム](#) [学習ログ](#) [学習コンテンツ](#) [あいである](#) [探究学習](#) [S](#)



企業プロジェクト



探究成果



探究レポート



調査メモ

ワーク

SDG sのゴール・ターゲットを閲覧し、特に私たちの意識改革が必要と感じるSDGsの項目（ゴール・ターゲット）を挙げましょう。

ゴール・ターゲット	私たちの意識改革が必要と感じる理由
ゴールNo.「1」 ターゲット「 - 」	※理想的な未来の姿にも波及しましょう。 ※理想を達成することがない限り、社会が持続可能な社会になることは不可能である。 ※社会が持続可能な社会になることは、社会が持続可能な社会になることである。
ゴールNo.「1」 ターゲット「 - 」	※理想的な未来の姿にも波及しましょう。
ゴールNo.「1」 ターゲット「 - 」	※理想的な未来の姿にも波及しましょう。

どんなアイデアを書きだしてみよう

生徒のログ

平野 悠介

2023年09月09日 18:11

平野 悠介さんが「探究学習」の探究成果をアップロードしました。

2023年09月12日 11:29

平野 悠介さんが「探究学習」の探究成果をアップロードしました。

2023年09月14日 17:51

平野 悠介さんが「探究学習」の探究成果をアップロードしました。

悠介さん

長谷川 悠介

2023年09月27日 18:24

長谷川 悠介さんが「探究学習」の探究成果をアップロードしました。

2023年09月27日 18:24

長谷川 悠介さんが「探究学習」の探究成果をアップロードしました。

2023年09月18日 17:55

長谷川 悠介さんが「探究学習」の探究成果をアップロードしました。

悠介さん

浜 悠介

2023年09月09日 18:05

浜 悠介さんが「探究学習」の探究成果をアップロードしました。

2023年09月09日 18:05

浜 悠介さんが「探究学習」の探究成果をアップロードしました。

悠介さん

中野 悠介

2023年09月09日 21:41

中野 悠介さんが「探究学習」の探究成果をアップロードしました。

2023年09月09日 21:41

中野 悠介さんが「探究学習」の探究成果をアップロードしました。

2023年09月09日 21:39

中野 悠介さんが「探究学習」の探究成果をアップロードしました。

Study Valley 駒場

探究支援事業の概要（社会とつながる）

学校の教室にしながら、企業の課題に対する取り組みや、探究テーマのタネを提供
ただ企業を紹介するのではなく、「答えのない問い」形式で提供し、調べ学習で終わらせない



どうすれば、若者をテレビに呼び戻せるのか！？テレビの存在意義から考える、インターネットとの共存方法とは？



探究支援事業の詳細（地域密着連携：じもと探究）

各県のテレビ局と共同で地域探究の枠組みを展開
地域の大人と高校生が交流するイベントを開催



UMKテレビ宮崎
8 OTV

TNCテレビ西日本
テレビ愛媛

高知さんさんテレビ

YBS山梨放送 70th

KYT鹿児島読売テレビ

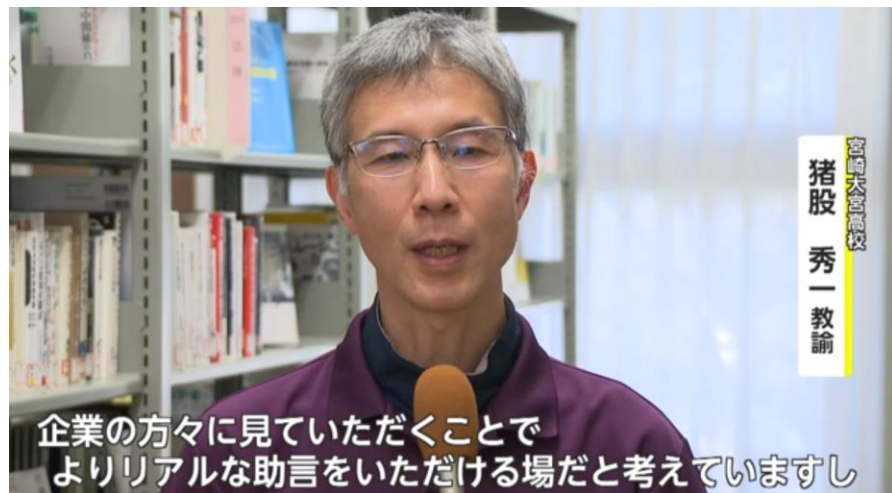
高校生と企業がつながる機会を提供

ただし、ただ繋げるのではなく、高校側が事前に企業が提供する課題に対して仮説立て
仮説立証に向けた論点整理のため、企業に「質問」（←一方的な「講演」にしない）



高校生と企業がつながる機会を提供

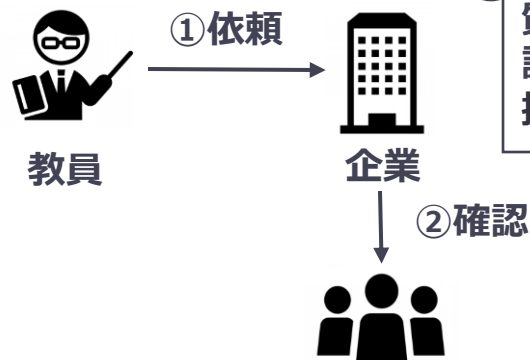
ただし、ただ繋げるのではなく、高校側が事前に企業が提供する課題に対して仮説立て
仮説立証に向けた論点整理のため、企業に「質問」（←一方的な「講演」にしない）



地方テレビ局と連携することで「じもと」の多種多様なプロジェクトを用意

地域（＝手触り感のある）の課題を提供することで、生徒の興味関心に基づいたプロジェクトを提供
さらに、学校だけでは準備が難しい「多種多様な」テーマを、生徒が主体的に選択

これまでの運用方法)



①の課題：教員の負荷が高い
企業数が限られる

②の課題：生徒が受け身
興味・関心のない生徒も

3 新たな課題
質の担保
講演内容と
探究への接続

じもと探究の利点)



様々な企業の
プロジェクトを用意

↓
プロジェクト化にあたり
質を担保
→参考探究テーマ
として提供

生徒・グループで
興味関心に基づいて選択



◎教員の外部連携に関わる手間削減

企業ショートリストの作成	4-8h
企業へのコンタクト	10h
企業との講演調整	10h
事前事後の学習アレンジ	35h

質を向上しながら
教員・探究コーディネーターの工数を
最大63時間分削減



WE ♥ HELP
ひなた 探究

その他動画リンク

- ・ [授業風景のご紹介](#)
- ・ [社会と高校を繋ぐイベント「ひなた探究Fesレポート」](#)

その他、各テレビ局にて地域連携に関する動画を公開中

参考資料

余り生地から生まれる、あなただけのオリジナルグッズをつくろう！



環境問題 地球温暖化 二酸化炭素排出 廃却処分 衣料廃棄物 社会課題 ファッション 服飾

MIYAZAKI FACTORY



MADE IN JAPAN

株式会社宮崎ファクトリー

宮崎ファクトリーは、ダーバン宮崎ソーイングとして1974年6月から創業を開始しました。2020年には、「宮崎ファクトリー」を設立し、既製品とオーダー服の両方を制作しています。百貨店向けの商品は、受注の管理から裁断・縫製・仕上げ・検査・出荷に至るまで一貫して自社にて行っています。さらに、自社ブランド[MIYAZAKI FACTORY]を立ち上げ、企画から、デザイン・パターン設計、フィッティング(採寸)、販売の全てを行っています。

レクチャー一覧



余り生地の種類や特徴について知ろう

環境問題 地球温暖化 二酸化炭素排出 廃却処分 衣料廃棄物 社会課題 ファッション 服飾



余り生地を活用したアイデアを学ぼう

衣料廃棄物 環境問題 アップサイクル ファッション産業



余り生地を利用したグッズ制作の仕方を学ぼう

衣料廃棄物 環境問題 ファッション産業 余り生地



オリジナルグッズのデザインをしよう

衣料廃棄物 環境問題 余り生地 ファッション産業 デザイン アイデア

参考資料

衣料廃棄物を地球のために減らすには？

【仮説①】 廃棄するときにCO2が減る



※ほとんどが可燃・不燃ゴミで廃棄している
※CO2の排出が多い

【仮説②】 海外に服を寄付して喜んでもらう



※SDGsの貧困をなくそうにつながる
※廃棄している衣料を再利用できる

【手立て】 1. オリジナルグッズを作る！

- ①学校で着なくなった服を集める
学校に服の回収ボックスを設置(まだ着れる服・布の切れ端...)
- ②宮崎ファクトリーさんのプロジェクトをもとに
オリジナルグッズを作る



アップサイクル

文化祭で出店する！

学校の文化祭でオリジナルグッズを販売

海外に送る！

- ・まだ着れる服はそのまま送る
- ・オリジナルグッズも送る
- ・送料→文化祭のお店で集まったお金



【まとめ】

毎日着ている服たちをただ着て終わるだけでなく、
再利用したり、海外に寄付したりすることで
服を作った人も、服を寄付した人もされた人も喜ぶ活動だと思います。

レクチャーで調べたこと

余り生地は廃棄にもコストがかかる。

再利用が難しい。

捨てられるはずの製品に新たな価値を与え再生し、デザインや価値観によって付加価値観が与えられる。
在庫商品を手作業でリメイクする。

余り生地が燃えるゴミとして処分されると、環境に悪影響を与える。

余り生地、リュックやアームカバー、エプロンを作り、お土産売り場などで販売されている。

問い：どのようなオリジナルグッズを作るか

ハギレで作るポーチを考えたい

老若男女問わず、簡単に使えるトートバッグを考えたい。

考えたアイデア

ハギレで作るポーチ



このアイデアが良いと思った理由

小さい余り生地はよく出ると思い、廃棄物をなくそうと考えたから。

余り生地を使うことで、自分なりのデザインを作れると思ったから。

シンプルだと老若男女問わず使えて、トートバッグは普段使うから。

プロジェクトを取り組んで学んだこと

ちょっとした余り生地でも使い方を考えれば、様々な小物に作り変えられることを学んだ。

シンプルで使いやすいトートバッグを作ることのように、小さい子供から高齢者まで、幅広い年齢でも使えるようなものを、自分たちは考える事ができることがわかった。

企業名 プロジェクト名	宮崎ファクトリー ～余り生地から生まれる、あなただけのオリジナルグッズ を作ろう！～
探究の問い	余った布を寄付する以外の、低コストで環境 にやさしい取り組みはどんなことがあるのか。
探究の背景 (この問いを選 んだ理由)	着なくなった服を大量廃棄することによって地球上の CO2が増え、地球温暖化を促進するという記事を見 たことがあるから。 また、この問題はSDGsの「つくる責任・つかう責任」 にも関係しているから。
仮説 (こうすれば企 業の困りごとを 解決できそう だ)	アップサイクルという活動を、企業だけでなく一般の 方たちにも広く知ってもらおう。 →着なくなった服でも作り直そうと思える。
検証したいこと	余った布を使ってどれだけのものをアップサイクル できるのか。 ひとつの余った布でも作り替えたらどれだけ多くの人を 救えるか。
検証方法	→周りの人から回収した布を使って オリジナルグッズを作る。 ・着なくなった服 ・少し汚れていたり一部なくなっているものでも、 余った布として使う。 →使ってくれる人に渡す・ ・作ったものを文化祭で売る・
検証後何が分 かっていいたか	使えなくなった服でも切ったり縫ったりすれば また使えるし、自分だけでなく全く関わりのない 人に喜んでもらえること。

事業を通じて見えてきた課題：学校に本当にお金はないのか？

学校現場においては価値観の転換が難しく、「これまでのやり方」にお金が使われているのでは？

また、入試制度等を整理することを前提に、教育現場における棚卸しが必要なのではないか？

社会の期待)

多様な学び・探究 > 教科的な学び



ギャップを埋める必要がある
探究的素養の重要性を
経済界と連携して意識醸成できないか？

学校の現状)

多様な学び・探究 < 教科的な学び



大学入試模試や、活用頻度の低い
システム等、棚卸の余地があるのではないか？

事業を通じて見えてきた課題：なぜ地域・社会は教育に投資しないのか？

学校の期待と企業の対応方針に大きな乖離が存在し、一度連携できてもその後は衰退してしまう
さらに、生徒の多様な学びと逆行する形で単一テーマとなり、寝てしまう（最悪なケース）



学校教員

期待値： 探究で困っているのとにかく来てほしい
バイアス： オンラインで話を聞くより
オフラインの方が教育的価値は高い
要望： なんでもいいから話してほしい

ギャップ
←→



企業

期待値： 会社の代表として、とにかく
自社のことについて知ってもらいたい
バイアス： 会社紹介さえすれば生徒の学びになる
要望： 後日アンケートの共有やアフターフォロー

期待値のズレ：企業が来てくれれば面白い話で生徒が食いつくと思ったが、寝ている生徒もいて、企業としても不完全燃焼

バイアス：学校はリアル重視だが、企業はオンライン化も進んでおり、移動時間を含めてやるのであれば、現地でやることの意味、を企画に織り込んでほしい

要望のズレ：企業の話さえ聞けば生徒が探究テーマを立てると思ったがあまりうまくいかず、企業も話したはいいが、その後どうなったのか分からない

事業を通じて見えてきた課題：なぜ地域・社会は教育に投資しないのか？

現状のROI設計では企業側のI(連携に係る工数)が大きい一方、Returnは不透明。学校はリアル・対面を是とする文化だが本当にReturnが大きいのか、は検討の余地がある

現状	Return	Investment
学校	・企業が学校に来てくれることで生徒はきっとやる気になる(はずだ) ・企業が来て講演してくれれば、今後生徒の探究テーマについては決めやすい(はずだ)	・企業への問い合わせや授業調整等、忙しい教員が一人で対応するには非常に手間がかかる。 ・出張授業前後のカリキュラム設計等、これまで経験したことのない業務。
企業	・採用で考えた場合、大学を挟むため直結しにくい ・高校生のアイディアは、自社の取り組みに活用可能なレベルではなく、あくまでも新しい観点を得る、程度 ・高校生であり、所得がないため直接的なマーケティングにも結びつきにくい	・移動時間や宿泊費、出張授業に充てる人件費を考えるとコストが非常にかかる ・これまで高校向けに、出張授業したことのない企業は、 ①企業紹介資料の再利用、 ②ゼロから高校生に話すために資料を作成せざるを得ず工数大

事業を通じて見えてきた課題：なぜ地域・社会は教育に投資しないのか？

理想的な状況はReturnについては企業によって異なるものの、企業のI(工数)を縮小することでROIの比率が改善できるのではないか。また学校側においてもReturnを見直すべきではないか？

理想形	Return	Investment
学校	・ 多種多様な切り口で生徒に選択肢を与えることで、主体性を持った課題設定が可能 ・ わからなかった時、もう少し調べてみたいときにもいつでも参照できる ・ 選択した課題に近い他の企業も参照できる	・ 授業準備にかかる手間を極力かけない ・ 企業との調整にも手間を極力かけない ・ ただし、<u>外部への委託に係る費用は捻出</u>しなければならない
企業	・ 自社に興味がなくとも、自社の取り組みについて多面的に課題化することで興味を持ってもらえる ・ 授業実施後の取り組みについても、学校と一体となってサポートできる ・ 多くの従業員が関わることで、従業員のエンゲージメント向上にもつながる	・ 出張授業に行かなくて良い ・ 教材制作には一定の工数がかかるが、一度作成してしまえば良い ・ 質問等の対応についても、<u>教員を介したメールのやり取りではなく、</u>高校生が考えたアイディアを成果物として受け取れば、対応が容易

未来に向けて取り組んでいること：探究高大産連携

これまでに紹介した高校と企業の連携だけでなく、大学も連携スキームに組み込むことで外部連携の幅を広げ、探究的な学びの支援を充実できないか

主目的 1)

自分の興味関心と、大学や専門学校への進学によってそれがどう深まっていくか、を探究する一助とする

背景課題 1)

大学進学に関連する情報は現在でも多く提供されているが、表層的な内容が多く、自分の興味関心が学術的にどう深まっていくか、が見えにくい
→結果、大学進学後、目的意識・主体性に欠けてしまう

主目的 2)

大学の専門的な領域は幅広く、身の回りの課題や産業と学問を紐付けることで、現在の探究学習の発展型をイメージしてもらう

背景課題 2)

学問の選択の自由度が高い一方、わかりやすさ、にフォーカスが当てられてしまうため、専門化した学部に対するイメージが湧かない



海洋系探究プログラム

海洋専門の大学や企業との連携で実現する最高の探究学習体験！
● 高大産連携により次世代の海洋人材育成を目指します

- 探究プラットフォームTimeTactを活用し、海洋系の探究プロジェクトに取り組む
- TimeTact上で学習進捗や成果管理、企業・大学連携まで全て実施できるので、どこからでも参加可能
- 海洋系大学教員との面談機会
- 探究成果に対する企業からのフィードバック

プログラム期間
2023年10月1日から随時提供
(学校様によりスケジュールが異なります)

参加費用 無料

対象者 高校1年生-高校3年生

募集人数 上限なし

募集期間
2023年9月1日-2024年2月1日

選考有無 なし

参加費用 無料!

未来に向けて取り組んでいること：探究インターン

三省合意により変更となったインターン制度に合わせ、高校生向けプロジェクトを活用したインターンプロジェクト、大学生向けプロジェクトを活用した高校生向け探究コンテンツの開発

三省合意によるインターン制度変更

1. 三省合意によるインターン制度の変更は、学生が**企業の実際の課題**に取り組むことを推奨
2. さらに、**期間は5日以上**でなければならず、**社員による指導とフィードバック**が必須
3. しかし、その実現には企業が**既存のインターン内容を改善**する必要があり、**企業負担が大きい**。



PBL X INTERNSHIP

探究インターンシップ

探究×インターン：実際の企業課題に取り組む新しい形のインターンシップ！

主要内容

- ・探究プロジェクト型インターンを通じて、思考力・判断力といった汎用性の高い非認知スキル習得
- ・探究プラットフォームTimeTactを活用し好きなタイミングでインターン作業
- ・現場訪問機会・社員とのコミュニケーション機会
- ・充実したサポート体制
- ・成果へのフィードバックをもらう機会がある

プログラム期間

2023年12月1日～2024年1月31日

参加費 無料

対象者 大学生1年～大学生4年

募集人数

参加人数が規定人数に達した場合、先着順で募集を締め切らせていただきます。予めご了承ください。

エントリー期間

2023年9月1日～2024年1月5日

選考有無

参加企業の要望により有

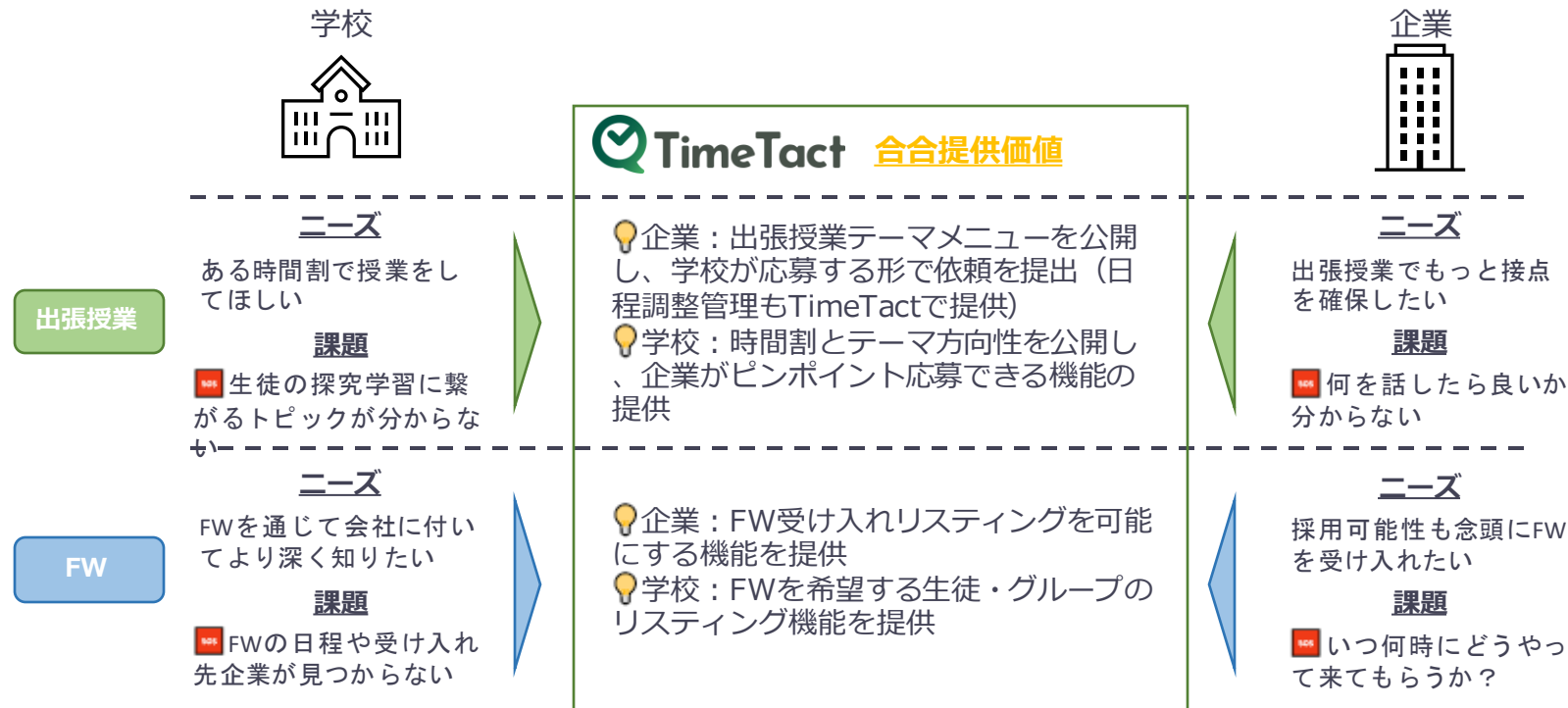
注意事項

詳しいインターンの情報は参加企業によって異なります。下記のリンクから申し込みをしていただいた後、詳細を提供させていただきます。

全力探究

未来に向けて取り組んでいること：探究合合（コーディネーター自動化）

コーディネーター人材要件ハードルは高く、さらに各校でコーディネーターを調達するのは資金面だけでなく人手不足も相まって調達が困難→コーディネーターの一部をシステム化



①自治体・学校と企業・団体の教育分野における連携のあり方

1)持続可能な連携を模索する必要がある

└企業に負担のない連携手法の確立により、連携ハードルを下げる

└学校の「リアル主義」は尊重する一方、使い分けの型化により期待値調整できるのではないか？

2)企業が教育参画するメリットを制度化できないか？

└補助金等、一時的なものは継続的な連携を促せず、混乱を招く可能性

└教育参画認定制度（参考：地域未来牽引企業）と、認定制度のメリット（地銀からの借り入れ利子補給等）を設計できないか？

3)質の担保

└教育的価値の担保が必要。多様な外部リソースの調達はいずれ質の低下を招く

└ポリシーの策定や、外部連携におけるガイドラインの整備が必要なのではないか？（ただし、細かいと参画者の障壁ともなるので慎重に）

②教育分野における事業性・財源確保の方策について

1)学校・企業双方にとって人的負担を減らす→負担減少分を金銭負担へ回せないか？

└企業の直接的なメリットは「採用」「広報」「マーケティング」等、事業に直結するものである一方、学校側は教育的価値を想定

└企業の直接的なメリットを訴求できない（教育現場の状況が変化しない）前提であれば、かかる工数を削減するための仕組みが必要

2)財源確保の方策については、部分的ではなく、全体を考えた場合、取りうる手段が絞られる

└高校探究に限定した場合、300万人x3,000円程度で考えた場合にも毎年90億の財源が必要

└ICT端末の更新や小中学校に広げる場合、更に財源が必要であり、短期的な方策と中長期方策を分けて考えるべき

3)教育産業におけるイノベーションの促進にあたり、エコシステムの構築が必要

└教育分野の事業は一般に時間がかかるため、スタートアップ型のイノベーションが起きにくい

└教育イノベーションファンド等により、国内教育産業の育成の検討もすべきではないか

③マッチング・認知面での課題

1)大学入試制度や教育の方向性についての例えば、今後20年のロードマップ等中長期の方向性と、現在への割戻しによって多種多様な学び、探究学習の重要性を定義する必要がある

↳現状「総合的な探究の時間」については、必修化された一方、認知度が低く、なおかつ今後どのような発展をしていくのか、が不透明

↳多種多様な学びの機会や、探究的な学びが将来的にどのように社会変容を促すか、を言語化することで、企業だけでなく世間一般の認知がとれるのではないかな？

2)企業が探究的な学びによって得られる能力（思考力・表現力・判断力）が事業成長にどう紐づくか、の明示する

↳変化の激しい中で産業構造の変容が求められる中、企業経営において探究的な能力はまだ重要視されていないのではないかな？

↳人的資本経営等、今後の変化に対応するための能力を定義するとともに、大人も探究的な学びを実施することで、教育現場における探究の認知も広がるのではないかな？

今後事業を通じて取り組んでいきたいこと : Hot Japan Fund

日本の今後の「Cool」を創れるのは紛れもなく人材。一方で優れたアイディアの一部にのみ資金が流れているがイノベーションの裾野を広げる必要がある。優れた探究アイディアの事業化と発展を支援

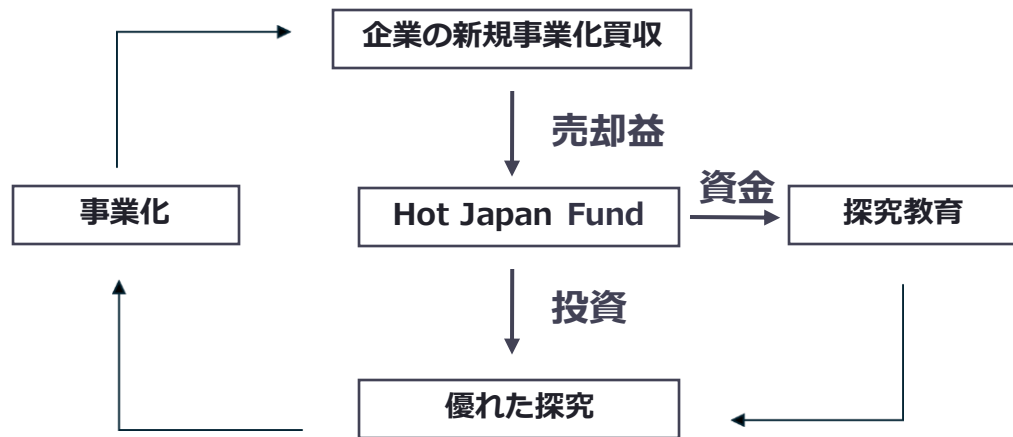
未踏IT人材発掘・育成事業
スーパークリエータ

IPA 独立行政法人
情報処理推進機構

トップ層育成は重要

一方

自分の身の回りの課題→課題解決ビジネスの構築、によりイノベーションの裾野を広げる必要があるのではないかな？



企業の新規事業構築や事業転換支援として、優れた探究をビジネス化し、シーズマーケットプレイスとして資金循環できないか

コンセプトは「先輩が稼いだお金が、後輩の学びのための資金源になる」
世代間格差をイノベーションで縮小できないか